

月見想（月・見る・想い）

奄美市立名瀬小学校 六年 川原 美里

「早く、早く。次の授業に遅れちゃうよ。」

リナのせかす声に、バタバタと教室を飛び出すユイがいました。

「ちよつと、リナまってよ。」

「もう、ユイはとろいんだから。」

そんな二人の表情は、とても穏やかで楽しそうです。

ある夏の夜の夜のことでした。リナは、一人ぼっちで空を見上げていました。頭上には、リナの悲しみを包みこむような大きな月が、辺り一面を照らしていました。傷ついたリナの心には、その光はあまりにも優しすぎました。

「お月さま、私にはどうして、人の心がわからないのかな。人の心が分かれば、どんなに楽だろう。わたしもお月さまのように、まあいい心になりたいの……。」

そんなつぶやきを、月は優しく聞いていました。

リナには、昔から大好きな友達がいました。おとなしくて、お人好しな性格のユイは、小さい頃からの友達です。それに比べて、リナは元気いっぱい、怖いもの知らず、何でも先に行きたがるせっかちな性格でし

た。そんな性格の違う二人でしたが、なぜか、妙に気が合うのでした。

「ユイ、リナつてさあ、少し勝手だと思わない。一緒にいて楽しいの。」

その問いに、ユイは小さい声で言いました。

「私、とろいから……。いつも、私の答えを聞く前に決められちゃうんだよね……。ちよつと勝手なところも。」

その言葉を聞き終わらないうちに、リナは二人の前にとび出して行って、

「ユイ、ひどい。私のこと、そんなふうに思ってたの。ずっと友達だと思っていたのに……。ユイなんて、何一つ自分のこと言えないじゃん。」

「違う。リナ、そうじゃないの……。」

ユイの言葉は、もうリナの耳には聞こえませんでした。た。

「いつも、私の後ばかりついてくるくせに……。自分の気持ちを言えないユイが、一番悪いよ。」

その言葉を聞いたとたん、ユイの顔色がどんどんくもっていくのをリナは感じました。しまった……。言い過ぎた。リナの心に、ドツと罪悪感がおしよせきてきました。でも、今までたまっていた感情をとめることはできず、どんどんユイを責めつづけてしまいま

した。

それから、二人の間には微妙な空気が漂っていました。親友と想っていたユイの気持ちにずっと気付くことのできなかつたくやしさを、そして、はずみとはいえず、大好きなユイを傷つけてしまった。くやしくて、悲しくて、どうしようもない思いが、リナの心にずっと残っていました。

大きな満月を見上げながら、いつものユイとの楽しかった頃を思い出していました。

「お月さま、どうか昔のように仲良くなれますように。」

満月の夜に、いつものように月に語りかけていました。その時です。大きな光が、リナを包みこみました。光の先には、あのけんかした日の二人の様子が見えてきました。ユイの言葉が聞こえてきます。

「私とろいからね、いつもリナに先こされちゃうんだよね。でも、やろうと思うことがすぐできるリナってすごいと思うし、一緒にいると、元気になるんだよ。ちよつと勝手なところもあるけど、そんなリナが大好きなんだ。」

あの日、リナには聞こえなかつた言葉でした。

「ユイ、ごめん。私、ユイの思いを知らなくて、誤解していた。なのに、もっとユイを傷つけてしまっ

・・・」

涙で言葉にならなかつた。涙にぬれた頬を、誰かがそつとぬぐつたように思えました。

同じ頃、ユイも空高く昇った月をながめていました。しばらく話もできなくなっていたリナのことを思いながら、同じように月に語りかけていました。

「お月さま、いつもリナばかり頼りにして、自分とは何一つ話せない自分の弱さがいやだ。リナの言うとおりだね・・・。私も強くならなきゃ。」

そうユイが思ったとたん、月がリナの今までのさびしさをうつし出しました。

「お月さまのような、まあいい心になりたいよ・・・。」と、リナのつぶやく声。ユイは知りました。いつも元気なリナの本当の心を。一番恐がりて不安で弱いリナの心。自分の意志をしっかりと言葉にして伝えなければ伝わらないけれど、きつとそれだけじゃない。思いあえば、きつと相手の心も分かる気がする。大切な友達を失わないために、今しなければならぬこと。

「ユイ、大好きだよ。そして、ごめん。」

この一言を伝えるために、リナはかけ出しました。月空の向こうに、にっこり笑っているユイがいました。

「ご・め・ん。」

二人は、照れくさそうに言いました。リナとユイが

見上げる空には、いつもと変わらない月。大事なことに気付いた二人には、今夜も、大きくて、優しい月が光輝いていました。

